

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

2015 年度在宅医療助成（後期）テーマ指定公募②
「地域包括ケアを目的とした在宅医療推進のための多職種研修会への助成」
完了報告書

平成 28 年度 北九州在宅医療・介護塾

第 1 回研修会：介護の社会化の今

第 2 回研修会：認知症を理解し、支援するために

第 3 回研修会：その人にふさわしい生活実現のために、ケアマネージャー
に求められる役割と課題

第 4 回研修会：「地域栄養サポート」推進にあたって栄養士の役目について

第 1 回フォーラム：排泄ケアを考える 2017 フォーラム

申請者：久保 哲郎

所属機関：久保歯科医院

提出年月日：平成 29 年 3 月 17 日

目 的：

北九州在宅医療・介護塾は、「地域包括ケアシステムの推進」を設立主旨に掲げ、「安全で安心して暮らせるまちづくり」を目指して2014年4月に設立し、地域の様々な団体からの支援を受けながら、年に4回、北九州在宅医療・介護塾 研修会（以下、研修会という）を開催している。

今回、アンケート結果やグループワーク討論を用いて、在宅療養者・介護家族（一般市民を含む）と、医療・介護・福祉・保健に関わる専門職（以下、専門職いう）の在り方と課題について検討を行いたいと考え、講師依頼する際の費用の捻出などのために、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団に助成金申請をすることにした。

研修会開催方法：

研修会の参加対象は、在宅療養者・介護家族、専門職、そして医療・介護系の学生や一般市民などで、企画・運営については、専門職による世話人によって構成された世話人会議で審議・決定され、運営している。また、地域で市民活動を永年続けている「NPO法人老いを支える北九州家族の会」、「認知症・草の根ネットワーク」や、福岡県歯科保険医協の他、多くの地域団体から理解を得て、研修会の講師や開催案内などの支援を受けている。

研修会の実施方法については、在宅療養者・介護家族と専門職、そして専門職と専門職との相互に対して「顔が見える関係づくり（⇒繋ぐ）」に應えるために、①社会保障を理解する．②在宅ケアを理解する．③在宅療養者・介護家族を理解する．④専門職を理解する．⑤口腔機能を理解する．を主たる研修テーマとして取り上げているが、「⑤口腔機能を理解する」をテーマに入れたのは、「在宅医療・介護」において、「在宅療養者が自分の口を使って食べる」ことが、療養者の状態改善を図るために有効な手段になるという報告¹⁾などの理由による。

又、研修会の講師については、介護家族や専門職などに研修会テーマに沿って経験談を交えた講演を依頼し、講演終了後には、研修会の内容評価やテーマに対して、参加者の考えを把握するためにアンケートやグループ討論を行っている。

そして、研修会の内容や、アンケート結果、グループ討論については、北九州在宅医療・介護塾HP²⁾による公開や、歯科協会機関誌などへの掲載、医療・介護関係の学会や研究会で発表、市民公開講座などでの報告を行ったり、次回の研修会で参加者に資料配布するなど、研修会で得た「在宅医療・介護情報」の共有化を図り、在宅現場で生じている様々な問題について啓発と理解に努めている。

研修会テーマ・講師など：

今回の助成対象となった研修会とフォーラムについては、以下のようになっている。

第1回研修会：

テーマ：介護の社会化の今

～医療・介護・福祉の連携現場からの検証～

講師：在宅サポートながさきクリニック

院長 長崎修二氏

日時：平成28年4月15日（金曜）、午後7時～9時

会場：国立病院機構 小倉医療センター

地域医療研修センター 鷗ホール

第2回研修会：

テーマ：認知症を理解し、支援するために

～認知症の人と家族が安心して暮らせる街づくりとは～

講師：NPO法人老いを支える北九州家族の会

理事長 高田芳信氏

認知症・草の根ネットワーク

理事・事務局 田代久美枝氏

日時：平成28年7月21日（木曜）、午後7時～9時

会場：国立病院機構 小倉医療センター

地域医療研修センター 鷗ホール

第3回研修会：

テーマ：その人にふさわしい生活実現の爲に

ケアマネージャーに求められる役割と課題

講師：北九州福祉サービス（株）

ケアプランサービスセンター小倉南

介護支援専門員 岩田和也氏

日時：平成28年10月20日（木曜）、午後6時半～8時半

会場：北九州市認知症対策・介護予防センターカフェ・オレンジ

第4回研修会：

テーマ：「地域栄養サポート」の推進にあたって栄養士の役目について
＝高齢者に対する栄養管理とは＝

講師：（株）明治 管理栄養士 宮田英乃氏

福岡県栄養士会北九州支部 栄養士 関根あけみ氏

日時：平成29年1月27日（金曜）、午後7時～9時

会場：国立病院機構 小倉医療センター

地域医療研修センター 鷗ホール

第1回フォーラム：

テーマ：「排泄ケアを考える 2017 フォーラム」

～トイレでの自立排泄に向けて～

日時：平成29年3月4日（土曜）、午後1時半～4時半

会場：小倉歯科医師会館

基調講演

- 演 題：排泄ケアを考える
～介護家族や専門職種に望むこと～
講 師： コンチネンスケアイノベーションセンター
おまかせうんちッチ 榊原千秋氏

シンポジスト

テーマ：トイレでの自立排泄に向けて
介護家族の思いと各専門職の実践活動より

- ①演 題：介護家族の声を聴く
～排泄ケアで困ったこと、良かったこと～
講 師：NPO法人老いを支える北九州家族の会
門司支部 大路順子氏
- ②演 題：排泄ケアに対する在宅医の役割
～排泄ケアで考慮していること～
講 師：在宅サポート ながさきクリニック
院長 長崎修二氏
- ③演 題：排泄ケアに対する看護師の役割
～看護師の実践から～
講 師： 看護師 真鍋哲子氏
- ④演 題：排泄ケアに対する理学療法士の役割
～理学療法士の実践から～
講 師：学校法人国際学園 九州医療スポーツ専門学校
理学療法学科 永野 忍氏
- ⑤演 題：排泄ケアに対する機能食品について
～腸を整える腸内フローラとは～
講 師：(株)クリニコ
管理栄養士 舛宗芳美氏

結 果

第1回研修会では、平成28年（西暦2016年）、介護保険制度発足から16年経った現在の「介護の社会化」について、医療と介護・福祉の現場からの検証、そして、「看取り難民」ということばでささやかれる在宅医療の現実と今後、および医療・介護・福祉の連携の在り方について在宅医の視点から情報提供があった。

この研修会で実施したグループ討論では、「在宅医療・介護の現場」で生じている問題として考えられることは、「専門職連携の困難性」と「在宅介護の困難性」についてで、これらの問題に対する解決課題としては、「介護による肯定感の形成」が求められるということだった。
先ず、「専門職連携の困難性」については、制度の問題やお互いの職種の理解不足や知識の隔たりや、専門職に患者や家族の意向が通っていない、そして患者をみない医療連携になっていることが、その要因となっている。

さらに、ケアマネージャー自身は介護ケアにおいて必要として認識しているにも関わらず、医師への壁の存在によって医療連携に困難を感じている者が多く、また時間的余裕がないなどが、専門職連携のさらなる困難性の要因となっているということだ。

「在宅介護の困難性」については、制度の課題や地域介護力が低下したため、周囲の理解、協力がえられないことが要因となっており、そのため、在宅介護では限界を感じ、老老夫婦や独居老人などは諦めている場合もあるようだ。

次に、解決課題の「介護による肯定感の形成」については、介護家族が介護を継続するには介護の負の側面だけでなく、介護の肯定的側面を形成していくことも重要であると考え、本人と家族だけでは難しいことはいうまでもない。また、施設介護であっても、介護職のやり甲斐や満足感の形成に繋げることが必要であるということだった。

このようなことを踏まえて、「多職種連携の問題解決」については、1. 連携の中心に介護される本人と家族をおく。2. 専門職に対しては、お互いを理解し尊重し合い、どの職種にも通じるコミュニケーション力の向上に向けて努力し、職種が違っても目標やゴールが同じになるよう意識改革を行う。3. 地域に対しては、地域力を向上させていくための、インフォーマルな地域の取組みを確立することで孤立化を予防するとともに、また専門職であると同時に住民であるため、その知識や技を地域力に生かすことが必要であり、本人と家族、専門職、そして地域との「顔と顔の見える関係づくり」が医療・介護・福祉の連携を図る上で重要であるということだった。

第2回研修会では、今後の認知症支援を推進するためには、「認知症になっても安心して生活できる優しい社会を早期に構築すること」が求められ、このような社会を実現するには、介護家族や専門職を含め市民が認知症について正しい知識を持つとともに、認知症者に対して積極的な対応や支援することが必要であることはいうまでもない。

今回の研修会では、在宅で療養している認知症者を取り巻く課題や、その課題に対する対応や支援策について情報を得る機会となった。

まず、「認知症の人とその家族が安心して暮らせる街づくり」のためには、それぞれの立場を越えて人としてどのように向き合い連携していくかということが大切であり、また地域に住む当事者としての目線も必要である。そのような意味で専門職だけでなく、市民も協働してこのような研修会に集い、意見交換をすることの意義は大きいと考える。

また、今回の研修会におけるグループワーク討論では、とりわけ（認知症本人）としてのMC Iに対する心構えや、日ごろの生き方、地域とのかかわり方などに対する意見が多くあった。

研修会に参加する事が既に意識の高さを示していると推察できるが、行政の施策に一存するのではなく、自らが認知症の予防のみならず、その対応について考えることが今後の地域づくりの重要なカギとなることを改めて認識する機会となった。

第3回研修会では、団塊の世代が75歳以上となっていくことに伴い、要介護状態になる高齢者の割合が急速に進むことが見込まれるため、地域全体で高齢者を支えていく必要性が高まるとともに、利用者の意向も多種多様になることが予想される。こうした中、その人にふさわしく適切な支援を行うためには様々な地域資源を使い、総合的にマネジメントすることがこれまで以上に求められることになる。

今回の研修会におけるグループワーク討論によって、「在宅復帰に向けて相談や、医療や介護に対するサービス調整を行う役目だが、ケアマネジャーとしての認識や知識などに違いがあるため、ケアマネジャーの仕組みを理解されていないケアマネジャーが多い」、「多くの情報収集を行うことでケアマネジャーの質の向上を図り、ケアプランに反映させることが必要」、「医師が介護支援体制の頂点となっているため、ケアマネジャー本来の”繋ぐ”機能が現場では果たせていない」、「書類の多さ、会議の多さと比例して、本人様や家族の意向に大変な気配りをしているため、非常に激務な職種である。また、ケアマネジャーの人柄や相性、情報の多さが職務に関わるため、ご家族やご本人様の望んでいることに対して真摯に答えているのかが見えにくい」などのような内容で、ケアマネジャーを捉えていることが理解できた。

また、ケアマネジャーについては、「民生員、町内会長などと連携を図り、利用者と事業所との繋がりや、フォーマルサポートやインフォーマルサポートなどの社会資源を幅広い利用を図ること」、「地域との交流を積極的に行い、インフォーマルな資源の活用など地域との関わりを図ること」、「ケアマネジャーは繋ぐことが役割なので、医療制度の在り方を明らかにして本音が言える関係づくりを図ること」、「積極的に情報交換を行い、ケアマネジャーは医療や地域に関わる多くの情報を得ること」などの他、ケアマネジャーに対して介護家族や専門職から“繋ぐ”役目を十分に果たすことを求めているようだ。

「介護保険における適切なケアマネジメントの推進に関する調査研究事業 新たなケアマネジメントの評価のあり方を探る」（平成22年度厚生労働省老人保健健康増進など事業、平成23年3月、代表白澤政和）によると、利用者は介護支援専門員に最初に会った時の期待は、介護保険制度のサービスと調整をしてもらうことだけでなく、相談相手や見守りを求めているが、ただし、医療との調整についての期待はやや弱く、半数程度しか求めていなかったと報告されている。

このようなことを踏まえ、医療サービスとの調整も含めて、医療保険制度や介護保険制度によるフォーマルサポートや、介護保険などの制度を使わない、例えば地域の”認知症カフェ”など、NPO法人やボランティアグルー

プ、家族・親戚・町内会などの支援によるインフォーマルサポートを活用し、利用者ご本人の生活全体を支援する役割としてケアマネージャーに期待されていることを再認識する研修会となった。

第4回研修会では、1.「低栄養予防 ～上手に食べて、元気に長生き！～」と、2.「地域の絆を深めて、いつまでもともに過ごせる、地域に根ざした食育を求めて」の2つのテーマについて研修を行った。

まず、1.「低栄養予防 ～上手に食べて、元気に長生き！～」では、在宅高齢者の約7割が「低栄養」の危険性があり、健康寿命増進を図るには、栄養素・お食事の工夫・栄養補助食品の使用が必要であり、そして、2.

「地域の絆を深めて、いつまでもともに過ごせる、地域に根ざした食育を求めて」では、高齢者が、元気で自分らしい暮らしを最期まで暮らし続けていくためには、地域社会において栄養・食生活支援は欠かせない。そこで、2014年より“サニー茶論”を立ち上げ、長年住み慣れた地域で、“楽しく健康に生きるために”をスローガンに地域の方々と協力して、「食」と「運動」を通して交流を深めており、このサロン事業に対する効果の報告と、今後の課題について話合った。

そして、この研修会では、高齢者が「美味しく食べる」ことは、栄養を摂るだけではなく、生活の中でも感動や情動に関わることになるため、QOLを考えるうえで大変重要な要因になると考えられているが、在宅療養者のQOLを阻害する要因としては、摂食嚥下障害、低栄養、便秘、下痢、褥瘡、脱水、糖尿病や心臓病などがあり、そのため、高齢者が「美味しく食べる」ことを続けるには、全身と歯・口の状態を適正にコントロールすることが重要であるということだった。

また、講師より、市民センターで実施しているサロン活動で、80歳、90歳の高齢者に対して3年前と比較して体脂肪率や運動量などが低下せずに維持できていたという非常に素晴らしい報告があり、介護予防として栄養と運動をサロン活動で取り入れることの意義について再認識させられた。

このようなことを踏まえて、エンディングを迎える迄の間、「食べたいものを、食べたい時に、食べたい人と、しっかり噛んで、美味しく食べる」ことの実現に向けて、歯科医師・歯科衛生士が行う口腔ケア（器質的ケア・機能的ケア）と管理栄養士が行う栄養ケアにリハビリが行う運動ケアを組み合わせた取組みが、介護予防から終末期に至るまで全身の機能を維持・改善するうえで非常に大切な要因となり、この実現に向けては在宅療養者・介護家族と専門職、そして行政、地域がチームを組んで積極的な「地域栄養サポート」を進めていくことが必要であることを学ぶ機会となった。

第1回フォーラムでは、基調講演から、「排泄ケア」とは、ご本人の望む暮らしの実現であり、このことを可能にするためにチームアプローチとしては、1. ニーズ・目標の共有ができること。2. ニーズに応じたチームをつくること、が求められる。そのため、排泄ケアに対して良い連携を図るためには、①排泄ケアに必要な知識を共有すること。②共通の心構えを持つこと（ケアの楽しさの共有）。③アセスメントやケアの技量に優れていること。④他職種のパートナーの性格や力量をよく知っていること。⑤懐の深い大人の議論ができること（共通言語・判断能力・コーディネート能力）。などが必要だということだった。

シンポジストからは、●寝たきりになった今でも声掛けとスキンシップは元気なころと同じように接している（家族の会）、●排泄は人間の尊厳・自尊心に重大にかかわるが、排泄ケアを必要となった患者に対しては、多専門職との連携や情報収集なしには正しく排泄のコントロールの支援はできない（在宅医）、●利用者のその人らしさを大切に、生活背景・排泄の機能や仕組みを専門的に理解し、介護（ケア）や医療（治療）になく、トータルサポート役であると考えて。高齢者の排尿に関する悩みは、尿失禁・頻尿・認知症での排尿障害が多く、排便の悩みは便秘が多い。家族の介護負担の軽減は、まず排泄ケアから。多職種協同しお互い顔の見える関係、医療・介護サービスを上手に活用できるよう支援することが求められる（看護師）、●排泄動作の一連の流れの中では、「トイレへの移動」「便器への乗り移り」「下衣の上げ下ろし」などに介助が必要となる。排泄動作に介助が必要な理由として、「下衣が上げられない」などの下衣更衣に関するものが多い、「下衣の上げ下ろし」にかかる時間はバランス能力など身体的な能力の反映など報告されている。排泄動作の自立に対しては、「下衣の上げ下ろし」動作に着目してはどうか（理学療法士）、●腸内細菌叢は、加齢やストレス、食生活によって、容易に崩れてしまうことから、理想的なバランスを保つためには、腸内環境を整えることの重要性、腸を意識したお食事を摂ることが重要（管理栄養士）など、について情報提供があった。

今回のフォーラムでは、生きるためには「飲食すること」が必要となるが、同時に「排泄」もしなければならないが、「排泄」には、命（生命）だけでなく、人間の尊厳や自尊心が重大に関わっており、そのため、排泄ケアは、専門職がそれぞれの知識や技術を持ち寄って、在宅療養者や介護家族に対してチームを組んで真摯な気持ちをもって、ハートフルに対応することが重要であることを学ぶ貴重な機会となった。

考 察

地域包括ケアシステムが円滑に機能するためには、“在宅”において「療養者・介護家族」と「専門職」が緊密な連携・協働を図ることが必要であることはいうまでもない。

このことに応えるためには、在宅医療・介護に関わる学術的な情報はもとより、「在宅療養者・介護家族」や専門職が抱えている様々な問題、悩み、苦しみ、望みなどについて、それぞれが知る、理解する、気づきなどを可能にする、「在宅療養者・介護家族」と専門職、専門職と専門職相互との「顔が見える関係づくり（⇒繋ぐ）の場」が必要となると考え、その実現を目的として、研修会を開催している。

平成28年度については、第1回研修会（講師：在宅医 テーマ：介護の社会化の今）、第2回研修会（講師：介護家族 テーマ：認知症を理解し、支援するために）、第3回研修会（講師：ケアマネージャー テーマ：その人にふさわしい生活実現の爲に）、第4回研修会（講師：管理栄養士 テーマ：「地域栄養サポート」の推進にあたって栄養士の役目）、第1回フォーラム（テーマ：『「排泄ケアを考える 2017 フォーラム」～トイレでの自立排泄に向けて～』について実施した。

実施した4回の研修会と1回のフォーラムについては、アンケート結果によると参加者から高い評価を得ていることから、それぞれの内容については十分に評価されたと推察し、また、グループワーク討論によって、介護家族と専門職がそれぞれに意見交換を行うことで、「顔と顔が見える関係づくり」を可能にしたと理解している。

このようなことを踏まえ、介護家族と専門職を講師及び参加対象者として、在宅医療・介護に関わる様々なテーマをとりあげた研修会の実施は、認知症になっても、障がいを持っても「安全で安心して暮らせるまちづくり」の一助とし、「地域包括ケアシステム」を円滑に機能する役目を担っていると推察した。

最後に研修会を今後も継続して開催するために、今回の助成対象となった研修会、及びフォーラムについて世話人会議で十分な検証を行うとともに、市行政との連携構築が可能になることを切に願っている。

平成28年度 北九州在宅医療・介護塾研修会(第1回研修会～第4回研修会、及び第1回フォーラム)は、公益財団法人在宅医療助成 勇美記念財団の助成による。

参考資料

- 1) : 白髭豊, 在宅高齢者の口腔機能の維持・向上と栄養改善のための多職種連携, 保健医療科学 2016 Vol.65 No.4 p.401-407
- 2) : 北九州在宅医療・介護塾 HP <http://kaigojuku.info/>